

第八回國際經濟史学会議と

第二回中國歴史地理學術討論會

斯波義信

一九八二年の八月と九月の間、ハンガリーのブタペスト市で開催の第八回國際經濟史学会と、中国の上海市で開催の第二回中國歴史地理學術討論會との二つの学会に参加し発表をしてきた。もちろん両学会はそれぞれ規模も由来も目的内容も、また方法そのものや主題も異なるものではあったが、しかし全体の討論の底流には、共通する今日的な學術動向が流れていた。さらにそうしたトレンドを見ながら、中國研究が今後どういふ課題を負ってゆくだろうか、について考えさせられる問題も多かった。以下は筆者の管見した二学会の状況報告である。

一 第八回國際經濟史学会議

この会議は毎四年の周期で開かれ、國際經營史学会と並ぶ

經濟史についての國際規模の学会の双璧である。主催地もストックホルム、レニングラード、エディンバラと、東西ヨーロッパを行き交いながら選定されてきている。東西ヨーロッパの学者達が会議の大勢を占めていることは事実であるけれども、テーマの選択や招請の範囲、そして報告者の顔振れについては、つとめてグローバルな参加がめざされてきた。今回は若干は地の利の不便のせいかな、参加者が少な目であったが、それでも参加名簿のみでも総数八八五名、家族同伴者も多かったので、来会者は千名を越していた。

十名以上の参加登録者がいた国々は、ハンガリー一〇〇、スウェーデン一〇二、英国九九、米国七二、西独七三、ソ連邦六四、オランダ六二、日本三八、フランス三七、東独三六、イタリー二九、ポーランド二五、スイス二〇、カナダ一九、ベルギー一八、ノルウェー一八、デンマーク一七、フィンランド一六、チェコ一六、スペイン一三、オーストリア一二であり、以下イスラエル八、オーストラリア七、ユーゴ六、ブルガリア五、ブラジル五、アイルランド四、インド四、トルコ三、ギリシア、コスタ・リカ、ポルトガル、ナイジェリア、アルゼンチン各二、南ア連邦・台湾・韓国各一であった。一方、テーマ別の組織者、報告者の色どりをみると、「國際」的に報告のバランスをとるようかなり配慮されていた。テーマは大(ⅡA計三)、中(ⅡB計一二)、小(ⅡC計三

六うち中止一)に編成された。A一は大所領と小所領—中近世ヨーロッパにおける領主と農民、A二は原基工業化—その理論と現実、A三は技術変革、雇用と投資、別に、自由討論としての歴史における飢饉。Aテーマを通じて議長、報告者、討論エキスパートは一四ヶ国三二名。米・英・仏・蘭・ポーランド・西独・ソ連邦・ハンガリー・ベルギー・伊からは複数以上が参加したが、A二では徳川時代人口史研究で著名の慶応大の速水融教授が加った。

Bテーマは、B一は経済理論と歴史、B二は経済・社会史における定量分析法、B三は長期トレンド、B四は消費のタイプ、B五は産業革命前・中・後期における女性労働、B六は植民地経済発展の諸類型、B七は比較研究、B八移住・人口および土地占取、B九家族企業から専業経営への変化、B十産業革命期における銀行構造の変革、B十一オリエント古代における核家族・大家族の経済、B十二古典古代における基幹物資の商業である。B一とB十二を除くと、ほとんどが比較的研究を通じて理論・方法と事実発見の深化をねらっている。全体で一三九人におよぶBテーマの組織者、報告者が参加国の大多数をカヴァーしているのは当然である。しかしそれらの中で各テーマへのコントリビューションの多寡がいれば、英・米・仏・東独・スペイン・西独・ソ連邦・伊・ポーランド・ベルギー・オランダ・ハンガリーの

報告が多く、これらの国々の上記のテーマへの取りくみの深さがある意味で表明していた。B四テーマでは安沢みね教授が日本明治期の消費パターン、B六では松井透教授が二〇世紀初めベルガルの農業変革、B九テーマでは森川教授が近代日本におけるトップ・マネージメントについて報告した。

Cテーマは、各々小グループで編成した個別集会である。

(一)経済史上の絹、(二)第二次大戦間の食料供給、(三)一九・二〇世紀の農業技術発展、(四)社会福祉体発展の比較、(五)木材と木材産業、(六)家族と経済生活、(七)鑄貨量・貨幣流通と交換率、(八)北欧都市史における自治体、(九)旅行記における理念と現実、(十)ワインの生産・取引・消費、(十一)一八〜二〇世紀公共財政と経済成長、(十二)バルト海・ヨーロッパ・北米海上システム、(十三)余暇の商業化、(十四)中欧の鉱業と貴金属、(十五)階級闘争・組合・経済発展、(十六)社会主義・資本主義企業における監督と統制、(十七)国家・経済および社会構造、(十八)初期近世の建設、(十九)工業化前・後における馬匹、(二十)中国経済史、(二十一)ヴァイキング期の貨幣と防衛組織、(二十二)オスマン・トルコ一九世紀の経済史、(二十三)移住研究の歴史、モデルと方法、(二十四)社会学と経済史(中止)、(二十五)歴史研究における地方史の役割、(二十六)大戦間のヨーロッパ経済、(二十七)一九世紀における貧困の原因、(二十八)経済思想の歴史、(二十九)国際市場における商人、一六五〇〜一八五〇、(三十)南米の人口と労働供給、(三十一)科学・技術変革と途上国、(三十二)中欧

・南欧における大戦間の国民経済トレンド、(編)東欧・西欧の
鉅業、一九世紀、(編)社会史研究の動向、(編)第一次大戦後ヨ
ロッパのインフレ、(編)周期景気変動。C テーマでは各セッシ
ョン毎に五〜六名から七〜八名の報告があった。したがって
会議全体で、登録者の半数近くが報告や討論に当り、かけも
ちで各セクションを訪れる人々の自由討議をふくめれば、ほ
とんど全員が実質参加をしたことになる。

会議は Semmelweis 医科大学の建物で八月十六日の開会
式で幕をあげ、二十日夕刻に終った。開会式ではハンガリー
国閣僚会議長 Gyögyy Lazar 氏の挨拶、国際経済史学会長
Zsigmond Pal Pach 教授の「経営的心性とハンガリー国民
気質」と題する講演、ついでフランス、アナルル・スクールの
創立者で、『資本主義と物的生活一四〇〇〜一八〇〇』(一
九六七)等の名著で有名な、国際経済史学会名誉会長の Fer
rand Braudel 教授への、ハンガリー科学アカデミー名誉会
員称号の授与が行われた。司会は組織委員長で、我国はじめ
各国を招聘のため歴訪された Gyögyy Ranki 教授であり、
セレモニの壇上の一員に国際経済史学会員(十二名構成)
中川敬一郎教授が加った。ついでにいうと、名誉学会長には
F. Braudel (仏)ほか、K. Glanmann (スウェーデン)、W.
Kula (ポーランド)、F. C. Lane (米)、P. Mathias (英)、
故 M. Postan (英)教授が加わっている。

初日の午後、A・B・C テーマの各セッションが一せいに
始った。我々のC二〇セッションは中国経済史もその一つで
ある。議長は楊聯陞・全漢昇教授の高弟、清朝財政史や貨幣
史の業績で知られ、ハーバード東アジア研究センター員、米
国ケンツ州立大の王業鍵教授で、報告書提出者は六名。時代
・テーマ別に分けて、結局、筆者が最初に始め、浙北地域、
唐〜民国間の水利と経済組織の関連を報告。ついでライデン
大学漢学研究所の E. B. Venner 博士が一九二八〜三二年、
関中を襲った大飢饉の社会経済的因果関係を分析した。この
あと金融関係史の報告が三本あり、まず香港大学の金融史の
碩学 F. H. H. King 教授が、そのライフ・ワークともいう
べき香港上海滙豐銀行史のなから、一九三八〜四一年、民
国幣制防衛のためなされた香港本店・上海支店の合作を、本
支店頭取間の書簡等原資料を駆使し、国際通貨戦争の位置づ
けを試みた。王業鍵教授は、一八四〇〜一九三七期における
旧式銀行業から近代銀行制度への移行に焦点をあて、山西票
号や錢莊業が没落して近代銀行に再生する間における国の介
入のプラス・マイナス、土着・外国銀行間の相補関係、工業
化への寄与の弱体についての原因究明を試みた。浜下武志教
授は、一八九八〜一九一六年期における中国金融界の組織構
造を分析し、列強からの金融借款の下で国民的経済がつくり
あげられつつあった時期に、幣制、商業セトルメント、公共

経済の部門で、金融媒介者の役割を演じた外国金融資本の重要性を指摘し、この段階ではまた中枢経済体が未整備であり、地方経済事情と中央政府の關係に焦点を求むべきことを論じた。最後に報告したハンガリー、科学アカデミー世界経済研究所、経済計画研究所員の Barma Tamas 博士は、中華人民共和国設立当初、体制移行についての党の一般指導方針、すなわち国際主義的に先進社会主義国の積極的支持をうけつつ、社会主義的工業化路線を歩むか、あるいは民族主義的に土地改革を優先し、漸進的近代化路線を歩むかの選択を、後者に立って目標を誘導した毛沢東の経済政策分析であった。

今会議のテーマの範囲や、開催の立地のためかもしれないが、中国経済史部門の発表が、個々には、また限られた範囲では豊かな内容を示しながらも、一セッションに散漫にまとめられ、共通の話題に展開するきっかけをもつに至らなかったことは少しく考えさせられた。Le Roy Ladurie 教授や A 二原基工業化テーマのメンバーから、日本と並んで中国のケースを比較の参照に問う声があがっていたし、B テーマでは植民地経済発展のほかにも、B 二定量分析、B 三価格の長期変動、B 四消費のタイプ、B 八移住・人口史、B 九家族企業から専業経営、B 十銀行構造、B 十二古代商業では、当然東洋史部門から加って然るべき顔ぶれを想起できた。C テー

マでも人氣のあった地方史研究ほか、旅行記の史料学、前近代経済史上の馬匹、家族と経済生活、鑄貨量と貨幣流通、経済史上の絹、国・経済・社会構造、トルコ経済史、近代農業技術発展等々、東洋史家にも共通のフォーラムが見出せた。

このいみでは、一九七七年夏、台北で国際級五十余名の中国経済史家を動員して開かれた近代中国経済史学会は、将来の国際討議にむけての重要なステップであったし、今回の King Wang 両教授の報告もまさにその延長に位置していた。その後の中国大陸における宋・明・清史国際討議も同様な重要性をもっている。しかし問題は、多角な視野からする比較が求められ、その発見手段としての枠組の精選と問題史的位置づけが問われる今日、中国経済史の現水準では、インテンシブ 見自体に精粗の不均衡が甚しく、加えて認識のスタンス、概括手続の方法でまだまだおくれと画一主義が目立つことであろう。

本会議の諸テーマを総覧してみると、アナール学派、社会史研究、構造主義、経済人類学、地域史研究が提起する枠組・方法が追究され、真価を問われていることは明らかであった。「Economic History Review 誌」や「N.Y. Review of Books 誌」で知名の P. Dayon, F. Mendels, D.C. Coleman, L. Wallerstein, J. Bouvier, E. Le Roy Ladurie, I. Lopez, R. Bos, W. Rostow, W. Minchinon, E. Boserup

教授らの活躍は目立っていた。観点をかえていえば、一般聴衆の印象でもあったように既成理論・方法・枠組の、多様な視野からする洗い直しが全般に求められ、またその必要性が痛感されるほどに研究がグローバルになり複雑化したのである。その一環として各テーマを通じて第三世界との比較や、文化生態・社会構造の全体的観察が問われているのである。かつて M. Bloch は『フランス農村史の基本性格』(一九三二)のなかで「研究の発展の過程には、多くの分析の仕事よりも、むしろたとい外見上は時期尚早であっても、総合することが一層役にたつ時期、いいかえると、問題をとくことを試みるよりも、むしろさし当っては問題をうまく提起することがとくに重要な時期がある」とのべた。経済史は社会科学と歴史の対話の場であり、歴史家の側で学ぶべきは、社会科学の提起する枠組・構想・概括プロセスであろう。東洋史も個別部門史の殻から一歩出て、比較考察に歩み寄る準備が必要な時が到来しているようである(各発表の詳細は、本邦参加者の主体であった社会経済史学会員の報告が予想されるのでこれにゆずる)。

二 第二回中国歴史地理学術討論会

この学会は九月一日〜五日、復旦大学歴史地理研究所と中国地理学会共催のもと、上海市の錦江飯店を主会場に催され

た。中国の歴史地理学会といえば、一九三一年成立の中国地理学会、三四年成立の禹貢学会、その機関誌「禹貢半月刊」で知名であり、七十年におよぶ伝統を誇ってきた。その間、竺可楨教授のように自然地理研究を推進した大家もすくなくないが、研究の大勢が文献学的地理学、とくに沿革地理・行政地理に重点をおいてきたことは、内外ともに周知である。もちろんこの伝統は現在も強く生きつづいており、一九八〇年に他界された顧頡剛教授、その衣鉢のよき継承者であり『中国歴史地図集』八冊本の編集者の譚其驤教授、『河山集』著者史念海教授らの労作に学統の深さをみることができ

る。しかし諸学の総合学際化、周辺領域の開発が叫ばれ、ことに新学問領域としての環境科学の充実が現代的意義を負って登場してきた今日、伝統学術の体制も一つの脱皮を求められるのである。こうして一九七九年夏、西安で第一回の地理学および歴史地理学の全国機関代表・工作人員のコンヴェンション、学術討論が開かれ、百篇近くの論文が読まれるとともに、斯学の現代的脱皮、研究教育の充実方法が議され、第二回会議を国際規模のもとに八一年次に催すことがはかられた。

史念海教授主編『中国歴史地理論叢』第一輯(一九八二)、新しい学会誌譚其驤教授主編『歴史地理』創刊号(同)、同じく『中国自然地理』分冊の『歴史自然地理』(一九八二)、

黄盛璋教授『歴史地理論集』(同)、そして復旦大学地理系の歴史地理研究室が最近独立して全国最初の歴史地理研究所(所長譚其驥・副所長鄒逸麟教授)となったこと、今回の会議招集がこの直接の産物であることはいうまでもない。この間、外遊中の北京大学侯仁之教授らが、英国 Darby, カナダ Harris, 米国 Skinner, Wheatey 教授らに参加を呼びかけ、筆者には杭州大学の陳橋駅教授を通じて勧誘がなされた。会期ははじめ三月末と伝えられていたが、事情でおくれるうちに海外参加者の多くが都合がつかず、六月に受けた正式招請状では、海野一隆(阪大)、布目潮風(同)、秋山元秀(愛知教育大)教授と筆者が海外から招かれ、布目教授は日程の都合わるく結局三名が海外から加った。「歴史地理」創刊号にはロンドン大 M. Sannels 教授の書評 G.W. Skinner (ed.) *The City in Late Imperial China, 1977* がのびるもので、こうした海外知識との交流が一つのトピックであったろうことはあらかじめ推察できた。

開会は九月一日、錦江飯店の錦江倶楽部会議室で始った。われわれ外国人は楊愷上海副市长、学会役員、復旦大教授陣と会見・挨拶ののち会場に加った。参加者はちょうど百名位で、中国の来会者の方々は別のホテルからバスで通われた。開幕式は侯仁之中国地理学会副理事長と復旦大徐常太副学長の挨拶ではじまり、基調報告のトップは侯仁之教授「近年来

我国歴史地理学發展的主要趨勢」であった。ここでは、建国後三十三年來の学術發展史の中で、一九八一年來の前述の新しい学会編成・研究教育体制が波瀾壯闊の新局面であり、伝統学術の蓄積、唯物主義の基礎に加えて、海外学術思想と方法を吸収し、百花齊放の氣象の下に新興の学問を盛りたててゆくことが力説された。たとえば理論面では「中国歴史地理論叢」で、旧式の沿革地理を脱皮して歴史過程の合理的解釈にふみこみ、『歴史自然地理』では実地調査と歴史の総合になる Geomorphology の躍進がみられ、一方で自然決定論を克服して、自然地理、人文地理、経済地理、社会文化地理を綜合した新分野が築かれたことに言及された。

新領域の開拓については、最近の地質年代後期全新世の研究開発により、文献のギャップが埋められたことを、洞庭湖・渤海湾・砂漠のエコロジ研究の成果で例証、自然環境変化の法則性と人類の自然改造史に科学的解釈の道が開けたことを指摘し、純文献考証を超越するため関連学問の協同作業が必要であるとされた。また実際の問題や社会主義建設との関連にも触れ、気候変化、植生の変化、水系の変遷、海岸線、砂漠、水陸交通、都市、農田水利の諸変化への着目、辺疆地文への関心の必要性を説き、最後に『歴代疆域沿革地圖集』に見られるごとき伝統学術を一そう拡充し、人口分布、民族変遷、交通、経済変遷図の作製をプログラムに盛るべきこと

が主張された。

つづいて、寄稿された Harris 論文を李宝田中国科学院地理研究所員が代読した。趣旨は環境決定論をのりこえるべく、地域の機能主義的、組織論的研究の重要性を訴え、三大テーマとして、環境への適応志向、移住史、地域文化形成の研究をとりあげ、あわせて比較研究、過去と現代の対話、自然保護との関連を説いた。最後は南京大学の老師韓儒林教授である。ここでは歴史地理研究における言語・考古知識への習熟が不可欠であるという側面から、過去の文献偏重の傾きが批判された。魏源の『海国図志』、洪鈞の『元史訳文証補』、『新元史』の誤りをつき、屠寄の言語知識を称揚し、唐・元史ではアラブ・ペルシアの旅行記、言語資料の援用が重要であること、また漢・唐史にみるごとく考古資料への目配りが欠かせることを力説した。

午前の報告が終ると昼食と午睡の休憩がはいり、三時から分科会がはじまる。分科会は(一)野外調査、(二)都市研究、(三)交通・経済研究、(四)水文化研究の四セッションである。われわれ外来組はこの時間帯に、もっぱら各機関代表との意見交換・交流を行うよう配慮されていたので、分科会の内容は最後の総括報告にゆずり、以下午前の報告紹介をつづけよう。

第二日は譚其鵬教授の報告からはじまった。「在歴史研究中如何正確對待歷史文獻資料」と題するペーパーの冒頭で、

譚教授は地理学は歴史の補助学科でなく独自の綜合學術であると位置づけし、竺可楨・史念海・侯仁之教授の研究を引きながら、野外調査・自然觀察を歴史研究と相補關係で用うべきこと、その一方で、歴史觀察の基本となる文物と考古のうち、文獻が最重要であり、博搜・選別・証明の周到さが求められると主張した。こうして研究者の目が錬磨されることにより正される事実の例として、赫連勃々の建てた白城市は北魏の攻撃に備えた城塞コロニーで周辺は牧地であった、榆林三遷は砂漠南移との関りであらうべきでなく、榆林衛の度重なる拓建、三拓の誤伝、黃浦江が春申君により開鑿されたとするのも訛伝、雲夢沢は本来長江を南北にまたぐ大沼沢で江北のみに比定できない、洞庭湖は漢、晋、宋、最大、以後縮少と変遷した、禹貢は夏の規制でない、九州は夏の行政区画でもない等々があると。要するに安易な文獻の立証を避け、周到な文獻批判を基礎に、現地の悉皆調査と自然觀察の眼を鍛えることで科学性は保証されるのであるという結論である。

ついで海野教授が、揚子江の名称につき、古来、揚・楊二つの用例が不定に用いられ、さらに洋子江の名がおこって併用されるうち、西洋人の所謂 Yangtze R. の呼称が生じたことを、豊富な文獻、スライドを用いて立証した。このあと、筆者は長江デルタ部の歴史的水利干拓の推移を、空間的

な地形区分、可用技術や社会組織の發展史との関連で分析し、紹興三江閘システムの明代における成立に、伝統システムの完結がみられることを指摘した。海野（日文発表・中訳）・斯波報告（中文代読）で各一時間をとってしまったので、復旦大の老師楊寛教授の報告は次日午前となった。

第三日目、午前中で七報告が読まれた。楊寛教授「西周春秋時代対東方和北方的開發」は、西周が諸侯を分封して東方・北方に派した意図には東夷集地域の治安と開發を求めたこと、また祁国を河北西南に封じて戎狄の統御をねらったことが反映しており、こうして東方は齊・魯の拡大、北方は晋の拡大に収斂されてゆくことを論証、併せて周武王の韓公封建の地につき、河西説、河北説をしりぞけ、河東説を妥当とした。ついで、陝西師範大学の史念海教授が、「由地理的因素試探遠古時期黃河流域文化最為發達的原因」と題し、太古の黃土高原は某々原の名のつく一望の沃野が多くを占め、河流も清楚で農業・定住に最適であったが唐にいたって森林破壊がすすみ、植林が叫ばれ、下流も黃土の堆積で埋没し、人為破壊で環境一変した経過を論証した。『河山集』で野外考察を併用して新解釈を施せる二十余のテーマを例示した同教授ならではの発表だった。ついで秋山教授が日本の中国歴史地理研究の回顧と展望を講じ、研究領域、課題、方法、当面の問題点を紹介した。

このあと中国科学院自然科学史研究所の曹婉如研究員が、「現存最早の一部歴史地図集」と題し、宋祝安礼撰『歷代地理指掌図』纂修のいきさつ、地図学史的な位置づけを論じた。同書は明清の商程一覽系統の源流であり、宋代は地理学史上の一画期であるので興味ある課題で、かつて海野教授も論及されたことがある。ついで科学院地理研究所の張丕遠研究員が、「北京地域冬小麦收成与降水量相關」、一人おいて黄河水利委員会水利科学研究所の王涌泉教授が「中国近五百年大水的初歩研究及一九八〇—八二年的預報与驗証」を報告した。ともに氣象統計、作柄統計、さらに後者は衛星写真、太陽黒点觀察を動員したものである。自然史と經濟史・社会史を相關させる研究は、ヨーロッパ史、日本史でも近年いちぢるしくすすんでいるが、さすがに自然科学部門では長期トレンドの計量的掌握がここまで進んでいるじようである。これと、同じようなことは、野外調査の綜合研究についてもいえずである。この兩発表の間に、復旦大歴史地理研究所副所長の鄭逸麟教授が、「元代河患与賈魯治河」と「関于我国運河的幾個歷史地理問題」の二ペーパーの要点を略述された。一般に大運河と関連水系の交通機能がやや過大に評価されるが、東部平原の水系はシルトと冬季の乾燥のため、交通条件に限界があり、排水が大問題である。水位調節は不可欠であり、純經濟機能よりも国の漕運という公財政の効果を一義評価すべ

きであるという主張であった。

九月四日は、南翔鎮、嘉定府城、松江县城（唐仏塔、上海錢業公所建築物、同城隍廟置壁を移築した公園）、上海市博物館を參觀した。新と旧、都と鄙にわたり、景観・水系・文物を百聞不如一見の譬通り一日で脳裡に摺めるよう良く配慮されていた。最終の五日、午後、復旦大で閉幕式、記念撮影（ちようど百名）と、茶話会形式で総括報告があった。分科会報告で（一）野外工作組は、地形学の歴史地理学への貢献、比較・総合研究の重要性、自然地理研究の重要性を力説し、現今の水文・自然改造・建設に沿って研究をさらに拡充し、歴史・地理・天体現象研究を総合させること、野外調査と文献を基礎に「万巻の書を読み、万里を歩く」ことをモットーとする、とまとめた。

（二）の城市組は、県城に焦点をおき、西周、漢・唐、宋・元・明の各都市の人口・環境・文化・機能を論じ、さらに都市化の南遷、宋の福建・明の南京の経済発展との相関も議したと報告。（三）の交通・経済地理組では、古来の交通研究の成果、地域・地形・少数民族区・作物区との関連たとえば広東の経済変化などが議され、共通の話題として気候・農業史、都市地理、都市的科学技术の関連、こうした要素をふくめた広い歴史地理環境構造の設定を問題としたと報告。（四）の水文研究組では、運河や水系につき古来の地質と現状が議され、

地図関係では千年来江南の平原気候地図作製をめぐる方法と資料、歴史復元のための雨水と黄土沈積物や鉱物などの分析法を考え、旧河道、地下水をめぐる地形学的分析も検討、こうした現代資料の活用で金沙江等の発達史が明らかとなった。今後辞典を補填充実する要あり等とまとめられた。最後の挨拶は侯仁之教授で、互いに補短伸長して今後の発展を期したい、復旦大を好例とし科学的な人材養成、歴史地理学の大学授業での拡大、たとえば歴史学科に歴史地理学科を設けること、これらを着実に一步一步すすみたいと結んだ。

会期三日間の各午後の懇談や招待の酒会で、各方面の専門家と歓談できたことは望外の幸であった。これらを通じて親しく知遇を得た方々は、復旦大関係では、徐常太副学長、同歴史研究所の譚其驥・鄒逸麟・周維衍・魏嵩山教授、同博士課程生で通訳に当られた葛劔雄氏、同大学歴史系の楊寛・呉杰・樊樹志教授、学生で通訳に当られた周平氏。中国科学院地理研究所では、黄盛璋・鈕仲勉・張丕遠教授、李宝田研究员、外事室で通訳をされた杜仲朴氏。中国地理学会では、李之川副理事長、瞿寧淑秘書長（瞿秋白教授令嬢）。北京大学では地理系の侯仁之・徐兆奎・唐曉峰教授。科学院自然科学史研究所では曹婉如研究员。南京大学では輪儒林教授（林承坤教授不参加）。武漢大学では石泉教授。陝西師範大学では史念海・馬正林教授。華南師範大学では、ポーランド、ワル

ソノの國際地理学会から帰国の曾昭璇教授。なお、杭州大学の陳橋駅教授はブラジル國際学会に出席中で不在であった。

さて、すでに紹介した諸ペーパーのほかに、主として分科会で発表されたペーパーのうち、部数に余裕のあるものを会議末にいただいた。それらは、史念海「論唐代揚州和長江下游的經濟地区」、馬正林（陝西師範大）「唐長安城総体布局的地理特征」、唐曉峰（北京大）「從考古發現論証北京城起源和成長的交通条件」、周維衍（復旦大）「烏洛侯民族試探—兼談鄂温克・鄂倫春族源」、景愛（國家文物局古文獻研究室北京）「呼倫貝爾草原的地理變遷」、姚漢源（北京水利水電科學院）「北京古城垣周長及其所用尺度考」、張修桂（復旦大）「漢水河口段歷史演變及其對長江漢口段的影響」、周振鶴（復旦大）「西漢渠域特殊職能探討」、趙永復（復旦大）「歷史時期河西走廊的農牧業變遷」、王文楚（復旦大）「西安洛陽間陸路交通的歷史發展」、魏嵩山（復旦大）「丹陽湖區圩田開發的歷史過程」、樊樹志（復旦大）「明代江南市鎮蘇松嘉湖地區的剖析」、楊正泰（復旦大）「明清時期長江以北運河沿線城鎮的特點和變遷—兼論地理環境對城鎮的影響」、曹婉如（中國科學院自然科學史研究所）「中國古代地理學史的幾個問題」へ自然科學史研究第一卷三期一九八二、林承坤（南京大學）「上荆江河床演變与治理」へ南京大學學報・自然科學版一九八二年二期、葛劍雄（復旦大）「秦漢的上計和上計吏」、同「論西漢

時期人口の地理分布」、同「西漢人口論」へ中國史研究一九八一年四期、牙含章（社會科學院民族研究所長）「西藏—美麗的祖國邊疆」へ一九八〇、張德二「我國歷史時期降塵的氣候學分析」、我國近五〇〇年各區域旱澇變化及其与冬季冷暖的關係」へ以上、北京氣象科學院氣象科學技術報告〇四六号などである。このほか「地名知識」という月刊誌が出ており、地名学の諸論文を収載していることを知った。以上は全参加者の労作の一端であるが、中国の地理關係學術が、機關・機關誌・研究者層・テーマ・方法のうえで豊かに分化し、底力をもっていることが如実にうかがえる。

最後に印象をまとめてみよう。第一に痛感したことは、一九七九〜八二と開かれた會議に表明された新しいトレンドは、十分に内発的な起動力に支えられていて、しかも中国の實際的な知的要求、さらに海外の學術動向の趨勢とうまくかみ合っていることである。午前中の報告を担当した老師・中堅教授諸位の発表内容は、起るべくして起った中国地理學・歷史地理學の総合學術化・歷史と社會・自然諸科學の對話の深化、發想と視野・枠組の洗練について、その要点をしっかりと抑えて十分な長期展望を用意していた。國際學術動向への機敏で柔軟な対応という点では、おそらく戦前・戦後を通じて在外留學経験の深い老師の指導力、それに自然科學、社會科學系の若手の業績が物をいっているに相違ない。

現下の社会建設と実用知識の要請、国の組織力も考慮すべきであろう。第三世界の時代といわれる二十一世紀初頭にむけて何をなすべきかが問われる今日、単なる過去と現在の接続はもとより、先進地域のケースを金科玉条として追いこせ追い抜け流の、画一的なまた一枚岩的な状況分析は生産性にとぼしい。政治的一枚岩は実在しても、地理的あるいは経済社会的統合組織がかなりルースで不均衡であることが内外から指摘されている中国では、経済が埋没している社会環境、文化生態的環境、自然環境など、もろもろのセッティングを総体として掘りおこし、まとまりある地域ごとに整理比較し、さらに国際比較にもちこむことで、客観的判断と目標がえられるはずである。こうして学問も当然学際化、総合学術化を志向しなければならない。

筆者はこうした中国学会の軌道は穩当で将来性に富むものと思う。ことに文献を見る眼の精選と周悉、現地調査の奨励はいわば共に中国の伝統的なお家芸である。老師層と若手世代の中間に若干のギャップはあるといっても、国のサイズの広さからみて採長補短すれば、総合学術化にむけての必要人材は十分あり、こうした時点における中国伝統の組織力の技術がやがて力を發揮するであろう。近年国際交流にオープンになりつつある事情を考えると、地理の固有領域だけでなく、経済人類学、社会人類学、経済人類学などが問題にする

「環境」問題のグローバルな比較のうえで、中国学会が貢献度を高めてゆくことが推測された。

ところで懇談の席上、しばしば懐旧の思いをこめて、東洋文庫、旧東方文化研究所の老師の勞作・調査が話題となった。本年二月十日、惜しくも七十九才で御逝去になった青山定雄博士の御業績も、その一つであった。これらの先達の次世代にあたるわれわれが切に中国に望むことは、調査・資料採集の梓をもっともつと拵げてほしいということである。われわれの接近法は必ずしも中国の学会のそれと重なるとは限らない。しかし基本的に大事な点は本会議で強調された史料学と現地調査の周悉である。中国が国際交流の輪をひろげ、貢献を強めてゆくことは、同時にこうした基本点の国際化を含めるはずだからである。